

デーヴォ ガイド



2024.7.15-21

But **grow** in the grace and knowledge of our Lord and Savior Jesus Christ. To him be glory both now and forever! Amen. II Peter 3:18

L T G ガイド

- ①お互いへの感謝と誉めることを分かち合しましょう。(2~3つ)
- ②1週間の罪を言い表して悔い改め、互いに祈りましょう。
- ③礼拝メッセージの分かち合いをします。
礼拝メッセージの分かち合いが難しい場合はディポジションの分かち合い(なるべく短く)
- ④預言の祈り(主の御心を宣言して祈り)をします。

セル ガイド

- ①祈り、賛美によって主がここにいてくださることを信じ、聖霊様があがめます。
- ②互いの存在を感謝し、尊敬するところを分かち合しましょう。
- ③ディポジションの分かち合いをします。
- ④セルの目的と働きについてみなで共有して、祈り、遣わされて行きましょう。

家族礼拝ガイド

年長のクリスチャンがリードしてください。進め方にはいろいろな意見が出るかもしれませんが、「主に期待する」信仰が最も大切です。いつもの家族でいいのです。

- ①この1週間で神様はすばらしいと感じたのはどんなこと?
- ②この1週間でお互いにどんなことを感謝しますか?(または誉めたいですか?)1つだけ。
- ③聖書のみことばから、どんな実践をして、またどんな恵みがありましたか?
- ④互いの必要のために祈りましょう。

礼拝メッセージフィードバック

<今日の聖書箇所は…>

- ①神のみこころは?(信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど)
- ②どんな思いになりましたか?(感情や願いなど)
- ③生き方にどう適用しますか?(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか?)
- ④この世にあって何を実践しますか?



11:1 アハズヤの母アタルヤは、自分の子が死んだと知ると、ただちに王の一族全員を滅ぼした。

11:2 しかし、ヨラム王の娘で、アハズヤの姉妹のエホシェバは、殺される王の子たちの中からアハズヤの子ヨアシュをこっそり連れ出し、寝具をしまう小部屋にその子とその乳母を入れた。人々が彼をアタルヤから隠したので、彼は殺されなかった。

11:3 彼は乳母とともに、【主】の宮に六年間、身を隠していた。その間、アタルヤが国を治めていた。

11:4 七年目に、エホヤダは人を遣わして、カリ人と近衛兵それぞれの百人隊長たちを【主】の宮の自分のもとに来させ、彼らと契約を結んで【主】の宮で彼らに誓いを立てさせ、彼らに王の子を見せた。

11:5 彼は命じた。「あなたがたのなすべきことはこうだ。あなたがたのうちの三分の一は、安息日に務めに当たり、王宮の護衛の任務につく。

11:6 三分の一はスルの門に、もう三分の一は近衛兵舎の裏の門にいるように。あなたがたは交互に王宮の護衛の任務につく。

11:7 あなたがたのうち二組は、みな安息日に務めに当たらない者であるが、【主】の宮で王の護衛の任務につかなければならない。

11:8 それぞれ武器を手にして王の周りを囲め。その列を侵す者は殺されなければならない。あなたがたは、王が出るときにも入るときにも、王とともにいなさい。」

11:9 百人隊長の長たちは、すべて祭司エホヤダが命じたとおりに行った。彼らは、それぞれ

自分の部下たちを、安息日に務めに当たる者も、安息日に務めに当たらない者も、祭司エホヤダのところに連れて来た。

11:10 祭司は百人隊長の長たちに、【主】の宮にあったダビデ王の槍と丸い小盾を与えた。

11:11 近衛兵たちはそれぞれ武器を手にして、神殿の右側から神殿の左側まで、祭壇と神殿に向かって王の周りに立った。

11:12 エホヤダは王の子を連れ出し、王冠をかぶらせ、さとしの書を渡した。こうして人々は彼を王と宣言し、彼に油を注ぎ、手をたいて「王様万歳」と叫んだ。

アタルヤはイスラエルの悪王アハブと、バアル信仰をもたらした悪妃イゼベルの娘です。彼女はイスラエル王国からユダ王アハズヤに嫁いだのでした。彼女は身勝手な野心家で、自分の息子である王が死んだと見るや、自分が王となるべく嫁ぎ先である王の家族を殺してしまいました。

ユダ王国の王であるアハズヤがアタルヤと結婚したことが災いとなったのです。彼らは隣国イスラエルとの政治的融和を図ったのですが、肝心な神への信仰をないがしろにしたのでこのような結果を生んだのです。

結婚とは人と人が一つとなることです。ですから一方が偶像邪教に仕えているなら、その影響は計り知れません。やはり結婚において、また家庭を築くにあたっては、主を尊重して祝福をいただけるようにしましょう。

アタルヤの身勝手さは続きませんでした。王家の子ヨアシュが生き延び、王位に着いてダビデの血筋は守られたのです。列王記は人間の不信仰の連続ですが、その中で主の確かな御手が動いています。それだから信仰を持って生きた人々には、その信仰が完全でなくても、主の守りがあります。現代においてもそれは同じです。主を信じて勇気を持って、正しい信仰を行きましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたの中の部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



▶ 16日 火曜

列王Ⅱ



11:13 アタルヤは近衛兵と民の声を聞いて、【主】の宮の民のところに行った。

11:14 彼女が見ると、なんと、王が定めのおりに柱のそばに立っていた。王の傍らに隊長たちやラッパ奏者たちがいて、民衆がみな喜んでラッパを吹き鳴らしていた。アタルヤは自分の衣を引き裂き、「謀反だ、謀反だ」と叫んだ。

11:15 祭司エホヤダは、部隊を委ねられた百人隊長たちに命じた。「この女を列の間から連れ出せ。この女に従って来る者は剣で殺せ。」祭司が「この女は【主】の宮で殺されてはならない」と言ったからである。

11:16 彼らは彼女を取り押さえた。彼女が馬の出入り口を通して王宮に着くと、彼女はそこで殺された。

11:17 エホヤダは、【主】と、王および民との間で、彼らが【主】の民となるという契約を結ばせ、王と民の間でも契約を結ばせた。

11:18 民衆はみなバアルの神殿に行って、それを打ち壊した。彼らはその祭壇と像を徹底的に打ち砕き、バアルの祭司マタンを祭壇の前で殺した。祭司エホヤダは【主】の宮に管理人を置いた。

11:19 彼は百人隊長の長たち、カリ人、近衛兵たちと民衆すべてを率いた。彼らは王を【主】の宮から連れて下り、近衛兵の門を通して王宮に入った。王は王の座に着いた。

11:20 民衆はみな喜んだ。アタルヤは王宮で剣で殺され、この町は平穏となった。

11:21 ヨアシュは七歳で王となった。

「民衆がみな喜んでラッパを吹き鳴らしていた。」とありますから、アタルヤが権力をふるって

いた間も、人々は彼女の横暴や不信仰に嫌気がさしていると思われます。神に従わない者の末路はこのようなものです。自分の力に終りがあることを悟ることができず、それゆえ悔い改めることもできず、みじめな結果となるのです。

私たちはその逆で、主のことばに聞いて自分の足りなさや罪に気づき、常に悔い改め、人々を生かし、主の祝福をいただくものです。人々はそのような者に主の恵を見出し、主のもとに一致するという喜びが与えられるでしょう。

これまではアタルヤが権力をふるっていたので、誰も彼女を批判することができず、神に従う者がいないかのような社会でしたが、一たび主のみわざが起これば、「民衆」がその信仰を表すのです。主の群れには主に従う者が必ずいるのだと、信じて励ましを受けましょう。その点で勇氣を持ちましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



➤ 17日 水曜

列王Ⅱ

12:1 ヨアシュはエフーの第七年に王となり、エルサレムで四十年間、王であった。彼の母の名はツィバヤといい、ベエル・シェバ出身であった。

12:2 ヨアシュは、祭司エホヤダが彼を教えた間、いつも【主】の目にかなうことを行った。

12:3 ただし、高き所は取り除かれなかった。民はなおも、その高き所でいけにえを献げたり、犠牲を供えたりしていた。

12:4 ヨアシュは祭司たちに言った。「【主】の宮に献げられる、聖別された金のすべて、すなわち、それぞれに割り当てを課せられた金や、自発的に【主】の宮に献げられる金のすべては、

12:5 祭司たちが、それぞれ自分の担当する者から受け取りなさい。神殿のどこかが破損していれば、その破損の修繕にそれを充てなければならぬ。」

12:6 しかし、ヨアシュ王の第二十三年になっても、祭司たちは神殿の破損を修理しなかった。

12:7 ヨアシュ王は、祭司エホヤダと祭司たちを呼んで、彼らに言った。「なぜ、神殿の破損を修理しないのか。もう、あなたがたは、自分の担当する者たちから金を受け取ってはならない。神殿の破損にそれを充てなければならぬからだ。」

12:8 祭司たちは、民から金を受け取らないことと、神殿の破損の修繕に責任を持たないことに同意した。

ヨアシュにはエホヤダが必要でした。本当は彼がいなくても、主の目にかなうことをすべきでしたが、彼の信仰は自立的ではなかったのです。私たちも誰



かの指導や影響の中で信仰が励まされているということがあるでしょう。その人に感謝しつつ謙遜であることが大切です。

ヨアシュは良い信仰を持っていたようですが、「高き所は取り除か」ずにいて、間違った礼拝をしていました。主に従うとういうのは、すべてしたがってこそ、従順と言えます。「これくらいはいいだろう」と高をくくっていると、そこから自己中心になり、そこをサタンに用いられることがあるので注意が必要です。

祭司たちは、主に仕える意欲がありませんでしたから、その立場は意味をなしませんでした。主への奉仕は立場によるものではありません。何かの役目や係になっているだけで、奉仕している気になってはいないでしょうか。または自分は役目ではないからやらなくても良いと、口実にはしていないでしょうか。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



➤ 18日 木曜

列王Ⅱ

12:9 祭司エホヤダは、一つの箱を取り、そのふたに穴を開け、それを祭壇のわき、

【主】の宮の入り口の右側に置いた。こうして、入り口を守る祭司たちは、【主】の宮に納められる金をみな、そこに入れた。

12:10 箱の中に金が多くなるのを確認すると、王の書記と大祭司は上って来て、それを袋に入れ、【主】の宮に納められている金を計算した。

12:11 こうして、勘定された金は、【主】の宮で工事をしている監督者たちの手に渡された。彼らは、それを【主】の宮を造る木工と建築する者たち、

12:12 石工、石切り工に支払い、また、【主】の宮の破損修理のための木材や切り石を買うために支払った。つまり、金は神殿修理のための出費のすべてに充てられた。

12:13 ただし、【主】の宮のための銀の皿、芯取りばさみ、鉢、ラッパなど、いかなる金の用具、銀の用具も、【主】の宮に納められる金で作られることはなかった。

12:14 その金は、工事する者たちに渡され、彼らはそれと引き替えに【主】の宮を修理したからである。

12:15 また、工事する者に支払うように金を渡した人々が精算を求められることはなかった。彼らが忠実に働いていたからである。

12:16 代償のささげ物の金と、罪のきよめのささげ物の金は、【主】の宮に納められず、祭司たちのものとなった。

12:17 そのとき、アラムの王ハザエルが上って来てガテを攻め、これを取った。さらに、ハザエルはエルサレムを目指して攻め上った。



12:18 ユダの王ヨアシュは、自分の先祖であるユダの王ヨシャファテ、ヨラム、アハズヤが聖別して献げたすべての物、および自分自身が聖別して献げた物、【主】の宮と王宮の宝物倉にあるすべての金を取って、アラムの王ハザエルに送った。するとハザエルはエルサレムから去って行った。

12:19 ヨアシュについてのその他の事柄、彼が行ったすべてのこと、それは『ユダの王の歴史誌』に確かに記されている。

12:20 ヨアシュの家来たちは立ち上がって謀反を起こし、シラに下って行くヨアシュをベテ・ミロで打ち殺した。

12:21 彼の家来シムアテの子ヨザバデとシヨメルの子エホザバデが彼を討ったので、彼は死んだ。人々は彼をダビデの町に先祖とともに葬った。彼の子アマツヤが代わって王となった。

民がささげるための献金箱が設置されたことがわかります。人々は喜んでささげたということが、歴史誌を見ればわかります。喜んでささげるところに祝福があります。

そのように民の主に対する思いが純粋に表れた献金とその運用であったので、これを扱う人々の心も純粋に主に向きました。ですから「彼らが忠実に働いて」、そこには不正もトラブルもなかったのです。主に共同体の本当の姿がここにあります。

列王記は王たちによる、不従順の連続ですが、その時代にこのような良きわざも有り得たのです。今も信仰のためには悪い時代かもしれませんが、周囲の不信仰に惑わされたり、言い訳にしたりせずに、主のわざを心から純粋な思いで、喜んで前進させましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



➤ 19日 金曜

列王Ⅱ

13:1 ユダの王アハズヤの子ヨアシュの第二十三年に、エフーの子エホアハズがサマリアでイスラエルの王となり、十七年間、王であった。

13:2 彼は【主】の目に悪であることを行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの罪を犯し続け、それから離れなかった。

13:3 そのため、【主】の怒りがイスラエルに向かって燃え上がり、主は彼らをアラムの王ハザエル、および、ハザエルの子ベン・ハダドの手に絶えず渡しておられた。

13:4 しかし、エホアハズが【主】に願ったので、【主】はこれを聞き入れられた。アラムの王の虐げによって、イスラエルが虐げられているのをご覧になったからである。

13:5 【主】がイスラエルに一人の救う者と与えられたので、彼らはアラムの支配を脱した。こうしてイスラエル人は以前のように、自分たちの天幕に住むようになった。

13:6 それにもかかわらず、彼らは、イスラエルに罪を犯させたヤロブアム家の罪から離れず、なおそれを行い続け、アシエラ像もサマリアに立ったままであった。

13:7 また、アラムの王が彼らを滅ぼして、打穀のときのちりのようにしたので、エホアハズには騎兵五十、戦車十、歩兵一万の軍隊しか残されていなかった。

13:8 エホアハズについてのその他の事柄、彼が行ったすべてのこと、その功績、それは『イスラエルの王の歴史誌』に確かに記されている。

13:9 エホアハズは先祖とともに眠りにつき、人々は彼をサマリアに葬った。彼の子ヨア



シュが代わって王となった。

13:10 ユダの王ヨアシュの第三十七年に、エホアハズの子ヨアシュがサマリアでイスラエルの王となり、十六年間、王であった。

13:11 彼は【主】の目に悪であることを行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムのすべての罪から離れず、なおそれを行い続けた。

13:12 ヨアシュについてのその他の事柄、彼が行ったすべてのこと、ユダの王アマツヤと戦ったその功績、それは『イスラエルの王の歴史誌』に確かに記されている。

13:13 ヨアシュは先祖とともに眠りにつき、ヤロブアムがその王座に就いた。ヨアシュはイスラエルの王たちとともにサマリアに葬られた。

謀反によって王となったエフーの後、その息子エホアハズが王となりました。彼は「罪を犯し続け」たので、さばかれる身にありましたが、主は「イスラエルがしいたげられているのを見られ」て、救い手を与えられました。

主は悪王のために罪のない人が苦しまないようにくださったのです。指導者は大きな責任を持っていますから、主のみこころを行いつつ主に頼って、正しく計画を進めなくてはなりません。特に教会で指導する人はそうですし、何かの決定権を持っている人はそうです。

また主は公明正大な方です。一人の間違ひのために、全体が苦しまないように、愛の配慮をしてくださるのです。もっと信頼しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



20日 土曜

列王Ⅱ

13:14 エリシャが死の病をわずらっていたときのことである。イスラエルの王ヨアシュは、彼のところに下って行き、彼の上に泣き伏して、「わが父、わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち」と叫んだ。

13:15 エリシャが王に「弓と矢を持って来なさい」と言ったので、王は弓と矢をエリシャのところに持って来た。

13:16 エリシャはイスラエルの王に「弓に手をかけなさい」と言ったので、王は手をかけた。すると、エリシャは自分の手を王の手の上に置いて、

13:17 「東側の窓を開けなさい」と言った。王が開けると、エリシャはさらに言った。「矢を射なさい。」彼が矢を射ると、エリシャは言った。「【主】の勝利の矢、アラムに対する勝利の矢。あなたはアフエクでアラムを討ち、これを絶ち滅ぼす。」

13:18 それからエリシャは、「矢を取りなさい」と言ったので、イスラエルの王は取った。そしてエリシャは王に「それで地面を打ちなさい」と言った。すると彼は三回打ったが、それでやめた。

13:19 神の人は彼に激怒して言った。「あなたは五回も六回も打つべきだった。そうすれば、あなたはアラムを討って、絶ち滅ぼすことになっただろう。しかし、今は三回だけアラムを討つことになる。」

13:20 こうして、エリシャは死んで葬られた。モアブの略奪隊は、年が改まるたびにこの国に侵入していた。

13:21 人々が、一人の人を葬ろうとしていたちょうどそのとき、略奪隊を見たので、その



人をエリシャの墓に投げ入れて去って行った。その人がエリシャの骨に触れるやいなや、その人は生き返り、自分の足で立ち上がった。

13:22 アラムの王ハザエルは、エホアハズの生きている間中、イスラエル人を虐げたが、
13:23 【主】は、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約のゆえに、彼らを恵み、あわれみ、顧みて、彼らを滅ぼし尽くすことは望まず、今日まで、御顔を背けて彼らを捨てることはなさらなかった。

13:24 アラムの王ハザエルは死に、その子ベン・ハダドが代わって王となった。

13:25 エホアハズの子ヨアシュは、その父エホアハズの手からハザエルが攻め取った町々を、ハザエルの子ベン・ハダドの手から取り返した。ヨアシュは三度彼を打ち破って、イスラエルの町々を取り返した。

ヨアシュは偶像に仕える悪王ではありませんでしたが、神の存在や預言者の力は信じていたようです。困った時のみだったかも知れませんが、現代にもそのようなクリスチャンらしき人は教会にいるかも知れません。また自分自身の信仰が、困った時に頼るだけの信仰になっていないか、考えてみるべきでしょう。

ヨアシュは地面を3回しか打ちませんでした。これは色々な理由が考えられます。一つには、それほど多く苦難が来るとは思わなかったのでしょうか。二つめには、適当なところで終わらせても良いだろうと、軽く考えていたのかも知れません。三つ目には、戦と地面を打つことは関係ないだろうという考えです。

どれももっと真剣にこのことに取り組むなら、結果は変わっていたでしょう。主がことを行ってくれるのですから、真剣に信じて、主の御手を動かすように、取り組むべきです。信仰を表すこ

とは、現実とは関係ないような気がしますが、そこに信仰が表れるのです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？





14:1 イスラエルの王エホアハズの子ヨアシュの第二年に、ユダの王ヨアシュの子アマツヤが王となった。

14:2 彼は二十五歳で王となり、エルサレムで二十九年間、王であった。彼の母の名はエホアダンといい、エルサレム出身であった。

14:3 彼は【主】の目にかなうことを行った。ただし、彼の父祖ダビデのようではなく、すべて父ヨアシュが行ったとおりに行った。

14:4 すなわち、高さ所は取り除かれなかった。民はなおも、その高さ所でいけにえを献げたり、犠牲を供えたりしていた。

14:5 王国が彼の手によって強くなると、彼は、自分の父である王を討った家来たちを打ち殺した。

14:6 しかし、その殺害者の子どもたちは殺さなかった。モーセの律法の書に記されているところに基づいてのことであった。【主】はその中でこう命じておられた。「父が子のゆえに殺されてはならない。子が父のゆえに殺されてはならない。人が殺されるのは、ただ自分の罪過のゆえでなければならない。」

14:7 アマツヤは塩の谷で一万人のエドム人を討って、セラを取り、その場所をヨクテエルと呼んだ。今日もそうである。

14:8 そのときアマツヤは、エフーの子エホアハズの子、イスラエルの王ヨアシュに使者を送って言った。「さあ、直接、対決しようではないか。」

14:9 イスラエルの王ヨアシュは、ユダの王アマツヤに人を遣わして言った。「レバノンのあざみが、レバノンの杉に人を遣わして、『あなたの娘を私の息子の妻にしてくれないか』

と言ったが、レバノンの野の獣が通り過ぎて、そのあざみを踏みじった。

14:10 あなたはエドムを打ち破って、心が高ぶっている。誇ってもよいが、自分の家にとどまっていなさい。なぜ、あえてわざわざ引き起こし、あなたもユダもともに倒れようとするのか。」

14:11 しかし、アマツヤが聞き入れなかった。イスラエルの王ヨアシュは攻め上った。彼とユダの王アマツヤは、ユダのベテ・シメシュで直接、対決した。

14:12 ユダはイスラエルに打ち負かされ、それぞれ自分の天幕に逃げ帰った。

14:13 イスラエルの王ヨアシュは、アハズヤの子ヨアシュの子、ユダの王アマツヤをベテ・シメシュで捕らえ、エルサレムにやって来た。そして、エルサレムの城壁をエフライムの門から隅の門まで、四百キュビトにわたって打ち壊した。

14:14 彼は、【主】の宮と王宮の宝物倉にあったすべての金と銀、すべての器、および人質を取って、サマリアに帰った。

14:15 ヨアシュが行ったその他の事柄、その功績、ユダの王アマツヤと戦った戦績、それは『イスラエルの王の歴代誌』に確かに記されている。

14:16 ヨアシュは先祖とともに眠りにつき、イスラエルの王たちとともにサマリアに葬られた。彼の子ヤロブアムが代わって王となった。

アマツヤの信仰は「主の目にかなう」ことを行いつつも、「高さところは」除かなかったというように、不完全な従順でした。かつては主にしたがって勝利を得ましたが、慢心してイスラエルに

戦いを挑み、敗れたのです。

勝利は常に主に従う者に与えられることを忘れないようにしましょう。過去は問題ではなく、今主のみこころを行うかどうかです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

